

“東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 成果報告書

1. 実践活動・研究の名称

「避難児童のネットワーク形成およびその活動の支援」

2. 実践活動・研究の成果

(1) グループ代表者

①氏名： 根ヶ山 光一

②所属・職名： 早稲田大学人間科学学術院・教授

③構成メンバー（ 7 ）人

氏名： 白石 優子

所属・職名： 早稲田大学大学院人間科学研究科・博士後期課程 2 年

氏名： 持田 隆平

所属・職名： 早稲田大学大学院人間科学研究科・博士後期課程 2 年

氏名： 平田 修三

所属・職名： 早稲田大学大学院人間科学研究科・博士後期課程 5 年

氏名： 石島 このみ

所属・職名： 早稲田大学大学院人間科学研究科・博士後期課程 3 年
日本学術振興会特別研究員

氏名： 米澤 香那子

所属・職名： 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程 2 年

氏名： 相川 公代

所属・職名： 早稲田大学大学院人間科学研究科・修士課程 1 年

(2) 実践活動・研究の成果

背景

東日本大震災における地震・津波とその後の原発事故による全国の避難者数は約29万人（復興庁，2013），そのうち福島県内から全国（県内も含む）に避難している0歳から18歳までの子どもの避難者数は2万9千人（福島県，2013）である。子どもの避難は，家族の分離，地域ネットワークからの離脱，避難という状況理解の難しさ，転校先での適応の困難などさまざまな問題を抱える可能性がある。避難の長期化にともない，避難先での新しい生活に慣れ，人間関係を構築している子どもたちもいる一方で，家族全体の今後の見通しの立たなさによって，他児との交流が広がらないことが懸念される子どもたちもいる（平田ほか，2012）。

避難者が比較的多い地域では「交流会」と呼ばれる避難者間や避難者と地域住民との交流，賠償相談，情報交換などを目的とした集会在開催されている。しかし，その中で子どもが主体的に参加できるもの，子ども連れの家族が参加しやすいものは比較的少なく，上記の子どもたちの適切な受け皿となっていない可能性がある。

かささぎプロジェクトは，本助成プロジェクトのグループ代表である根ヶ山が立ち上げ，2011年6月以降母子避難者を対象にした支援と研究に取り組んできた。本助成プロジェクトは，かささぎプロジェクトとしての経験や知見をもとに，埼玉県西部地域を拠点とし，避難児童とその家族を対象とした支援と研究を行った。ここでは，その活動の中核となった「人形劇プログラム」（2012年8月～2013年8月）の成果を報告する。

支援の目的

本助成プロジェクトの目的は以下の5つである。

1. 避難児童とその家族への仲間づくり，友だちづくりの場を提供する
2. 子どもたちの継続的な協働作業により一つの作品を作り上げ，発表することによって，充実感や達成感を得るとともに，ストレスの表出を図る
3. 避難によって離れて暮らすことになった東北に残る家族に，活動の様子をおさめたDVDを送り，家族のふれあいの機会を提供する
4. 参加者を避難家庭に限定せず，避難先地域の家族の参加を促すことによって，避難先地域の情報を得るなど，避難先での生活の安定を図る
5. 避難児童の活動の様子を見守り，必要があれば臨床心理士や臨床発達心理士に専門的な対応を依頼できるようにする

方法

(1) 参加者の募集 2012年9月～2013年1月に，埼玉県西部地域の一部市役所等を通して避難家庭への案内配布，公民館や児童館での案内掲示や配布，避難者向け情報誌への案内掲載などで参加者を募った。2013年7月時点での活動初期からの継続的な参加者は，4家庭（幼児3人，小学生5人，中学生1人）であり，そのうち1家庭が避難家庭であった。

(2) 活動実施期間 2012年11月～2013年8月

(3) 活動形態と内容

月に1～2回，埼玉県T市内カルチャーセンターの一室で開催した。1回の活動時

間は2時間～3時間程度であった。

I 導入期 (2012年11月～2013年1月)

人形劇鑑賞，人形制作ワークショップ，ゲーム，昼食会

II 人形劇制作期 (2月～3月上旬)

人形デザインおよび人形づくり，ストーリーアイデア出し

III けいこ期 (3月下旬～4月)

台本読み合わせ，劇団名相談・決定，劇中歌のレコーディング，立ちげいこ

IV 目標達成期 (3月下旬～5月)

リハーサル，都内人形劇イベントでの人形劇上演

V ふりかえり期 (7月～8月)

感想文作成(自宅)，バーベキュー，ゲーム，一言スピーチ，アルバム制作，保護者アンケート記入(自宅)

- (4) 協力団体 小学生を対象に人形劇の指導をしているNPO「のういくネットワーク」から運営全般にわたり協力を得た。当日の運営補助として，大学生のボランティアスタッフの協力を得た。
- (5) ビデオ撮影 避難児童らを中心に様子をビデオにおさめ，その映像を東北に残る家族に送った。さらに，その映像を行動記述の資料にも使用した。
- (6) 分析
 1. ビデオ映像をもとに，人間関係の変化が見られた場面を中心に検討した。
 2. 参加児童に人形劇イベントでの発表後，それまでの活動を通じた感想文を各家庭で作成してもらい，活動を評価する資料とした。
 3. ふりかえりのバーベキュー後に，保護者にアンケートを依頼し，活動を評価する資料とした。

結果と考察

参加者の募集 様々な方法で活動を告知したものの，避難家庭からの反応は我々の予想に反しきわめて乏しいものだった。すでに学校でのクラブ活動や地域のサークル活動などで週末の過ごし方が決まっている，震災時の体験を思い出させることを危惧するなど，さまざまな事情がその背後にあった。活動の周知が進むにつれ，活動の趣旨に賛同し，あるいは生活環境の変化や学校でのいじめなどに悩み，不登校状態であるなど支援を求めてきた家庭もあったが，転居を予定している，活動日が保護者の仕事と重なっている，週末に東北に戻り家族と一緒に過ごすなどの理由でいずれも参加が実現しなかった。このように，継続的な支援活動を阻害するさまざまな要因が存在した。

そうした中，2012年11月になんとか3家庭からの参加希望をえることができ，活動を開始した。2013年1月に新たに1家庭が加わった。

I 導入期 初めての人と場所に直面し，緊張した表情を見せる子どもも多かった。第1回，第2回の会のはじめに人形劇を鑑賞したが，ほとんどの参加者にとって，人形劇鑑賞は初めての体験であった。第2回目のプログラムは，クリスマス会と称して開催した。きょうだいや保護者，スタッフと話しながら，個々にビニール袋で簡単な人形を作りあげ，その人形を使って即興劇を練習，発表した。これは子どもが人形劇づくりのイメージをもつことを助けた。

「初めてかささぎプロジェクトに行ったとき，とても緊張しました。知らない人達ば

かりだったからです。でも行ってみたらみんなやさしくておもしろい人達だったので、ホッとしました（MIちゃん・小3）」という子どもの感想文や「クリスマス会で（子どもたちの）緊張や不安が解けた（HOさん）」という保護者の回答からも、子どもたちの緊張と不安解消の変化がうかがえる。しかしこの段階ではまだ、子ども同士の相互作用はほとんどなかった。

Ⅱ人形制作期 この時期から子どもと保護者が分かれて活動する場面を増やした。親子が度々互いを見て確認する様子が見られ、分離不安があったことがうかがえる。演じたいキャラクターのデザイン画を描く過程では、スタッフの絵に感想を言うなど、積極的にスタッフに話しかける子どももいた。一方で、子ども同士が互いの絵に対して発言することは比較的少なかった。ストーリーのアイデアを個々に提案する過程では、「魚釣り」「空を飛ぶ」など個々のキャラクターの単独での動きが書かれた。感想文では、「私は（演じる役を）きつねにしました。理由は周りを見たときつねはだれもいなかったからです（MIちゃん・小3）」と、積極的な働きかけは少なかったものの他の子どもたちの様子を観察していたことがうかがえる。このように、ストーリーづくりという段階になって、互いの存在への求心的なまなざしが促進されたと推察される。

Ⅲけいこ期 初めて台本を受け取った子どもたちは、早々とページをめくっていた。感想文では「初めて台本を見た時とてもうれしかったです。自分のセリフがあったからです（KOくん・中2）」と、自分のセリフがある台本を手にとった喜びを書いている。他の子どもたちの笑いを誘発するために、台本のセリフにわざとアドリブを連発する子どもも登場し、それは子どもたちが打ち解け合うことを大きく促進した。自宅でも台詞の練習を自発的に行い、その習熟過程はめざましいものがあった。

人形劇団名の検討会では、一人が少々冗談めいた名前を言いだしたのに続いて次から次に20あまりの案が出された。最後は多数決をとって皆が納得する名前に決まった。感想文では、「名前づくりの時は、料理の名前がいっぱいで、その中でも「ハンバーグ」にきまり、とてもおもしろい名前になったと思います（KAちゃん・小6）」と書いている。この頃から、休憩時間にふざけあいが起こるようになり、親しさが増してきた。人形劇団名を考え、決定することを通してアイデンティティが強まり、「人形劇団の仲間」と意識できるようになったのではないかと推察される。避難家庭の親戚が活動の映像を見て興味を持ち、けいこの場に訪れることがあった点も、子どもたちが日常的に人形劇を生活の一部に取り込んでいたことを推察させる。

Ⅳ目標達成期 活動拠点であるT市から離れ、子どもたちとスタッフだけで都内でリハーサルを行った。リハーサルを終え、電車で帰る中、子ども同士が、お菓子を交換したり、名前呼び合う姿が見られた。保護者アンケートでは、「保護者無しで（リハーサルに）行けたのと、練習成功で自信をつけ、「もっとやりたい」と言うようになった（HOさん）」とあった。人形劇イベント当日の電車のなかでは、自発的にノートを持参し、子どもたち、保護者、スタッフそれぞれに、名前と似顔絵を描いてもらうようそのノートを回す姿が見られた。人形劇イベントでの発表を活動の区切りととらえ、思い出に残そうとしたと考えられる。上演直前に舞台裏でスタッフが子どもたちを集めると、子どもたちはすみやかに輪になり、スタッフの話真剣な表情で聞いていた。

上演では子どもたちが皆生き活きと与えられた役割を完遂し、成功裡に終えることができた。上演後、舞台前であいさつをする表情には、達成感がうかがえた。感想文から

は、「人がたくさんいて、とてもきん張しました。しかし、成功して今にもスキップしたいほどうれしかったです(HIくん・小6)」「また来年は少しレベルUPした劇を「(人形劇イベント)」で発表できたらいいなあ〜と、思いけっこう後のことなのに、今からむねがハレツしそうなくらいわくわくしています(HOちゃん・小6)」などと、上演が成功した喜びと次の人形劇への期待がこめられている。この時期には、保護者同士が談笑する場面も増え、互いに打ち解けている様子が見られた。このように、自らの協力で劇を創作し終えたという体験は、子どもたちに大きな満足感と連帯感をもたらした。

Vふりかえり期

バーベキューは、このプログラムで初めての屋外活動となった。子どもたちは、自分たちで火起こしをしたり、包丁で野菜を切ったりして準備をした。子どもたちがひとつのテーブルを囲み、そこに保護者が寄り添うように座って食べた。食事の後は、虫取りなどをしながら、自由に遊ぶ姿が見られた。スイカ割りでは子どもたち・保護者・スタッフが一つになり、笑いの輪ができた。最後に記念アルバムを配ると、子どもたちはそれぞれ懸命に思いを込めて寄せ書きをしていた。人形劇という決められた場面での仲間から、互いに交歓し合える友だちとしての関係に発展したように見受けられる。なお、この子どもたちはさらに引き続き人形劇づくりを継続することを熱望し、のういくのスタッフや私たちも支援の継続を決めている。

総合考察

回を重ねるごとに子ども間で、様々な親和・協同的な行動が増え、仲が深まっていった。一つの目標を共有しながら作業し、さらに本番の緊張感・高揚感、目標達成の喜びを共有したことにより、より一層つながりが強くなっていったと推察される。また、そうした子ども同士の関係性の変化は保護者にも波及し、保護者同士の交流も活発になっていった。参加した地元家族や協力者の中には、被災者支援に携わりたいという思いを持ちながらも個人での支援に難しさを感じている人もいた。さまざまな立場の人がかかわる場を設けることでそれらを互いに充足することができ、この支援は目的を達成したと考える。

本助成プロジェクトでは、人形劇を通して参加児童が主体的に活動にかかわり創造し、目標を設定し、中長期継続的に展開することで、親密なつながりをつくる試みを行った。これまで避難者向けの交流会やイベントは各地で開催されているものの、これらの特徴を持つ活動はほとんどない。

子どもたちにとって、避難は突然始まっている。親しい友だちに別れも告げられなかった子、生活を共にしていた家族との別居を余儀なくされた子もいる。そのような子どもたち（とくに児童期の子ども）にとって、避難先での仲間づくり、友だちづくりを支援することは、生涯の人間関係の構築に役立つと我々は考えている。それは同時に、当該の避難家族と子どもたち、およびその背後にいる多数の被災者の皆さんにとって社会からの眼差しの存在が継続していることをお伝えし、エンパワーしたことになっていると自負する。これからも、避難児童には、発達的な観点に立った長期的な支援が必要である。かささぎプロジェクトは、今後も何らかの形で活動を継続し、長期的に避難家庭に寄り添いながら、支援を続けていく予定である。

引用文献

- 平田修三・根ヶ山光一・石島このみ・持田隆平・白神晃子. (2012) .かささぎプロジェクトによる震災避難家族の支援 人間科学研究, 25, 265-272.
- 福島県. (2013) .東日本大震災に係る子どもの避難者数.平成25年4月1日. <http://wwwcms.pref.fukushima.jp/download/1/kodomohinansya250401.pdf>
- 復興庁. (2013) . 全国の避難者等の数.平成25年8月22日. http://www.reconstruction.go.jp/to pics/main-cat2/sub-cat2-1/20130822_hinansha.pdf

学会発表リスト

〈口頭発表〉


1. 根ヶ山光一 低線量被ばく環境下の福島での生活と県外避難に関わる心理的健康問題：福島の子と長期的ストレスに関する問題 公募シンポジウム 日本心理学会 第77回大会 2013.9 (予定)

〈ポスター発表〉

2. 白石優子, 持田隆平, 平田修三, 石島このみ, 根ヶ山光一 震災避難児童とその家族に対する人形劇づくりを通じた支援 日本心理学会第77回大会 2013.9 (予定)

2013年 8月 30日

“東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 会計報告書

活動・研究名称	避難児童のネットワーク形成およびその活動の支援	
代表者 氏名・所属	根ヶ山 光一 ・ 早稲田大学	

1. 助成額	¥700,000
2. 支出合計	¥700,000
(1) 機器・備品	¥114,300
1) WiMAX 更新ライセンス代3台分	¥114,300
(2) 消耗品	¥16,388
1) 文具	¥16,388
(3) 旅費・交通費	¥50,960
1) 稲荷山公園一小手指 1家庭(5人)6往復	¥18,000
2) 所沢市、狭山市内一池袋 人形劇イベントリハ本番	¥26,960
3) 駐車場代 5時間	¥1,500
4) 交通費チラシ配布のため電車代 領収証なし	¥4,500
(4) 謝金	¥117,840
1) のういくネットワーク 公演、指導料	¥100,000
2) 臨床心理士	¥12,000
3) 避難家庭インタビュー	¥840
4) アロマ講師	¥5,000
(5) その他	¥245,341
1) 人形劇けいこの道具、アルバム材料、人形劇イベント入場料	¥17,868
2) 会場レンタル 10回	¥50,500
3) 会議費	¥35,086
4) チラシ作成	¥13,859
3) 通信費	¥20,010
4) 催し、けいこ、ふりかえり会での飲食、バーベキューレンタル	¥108,018
(6) 使用予定	¥171,559
1) 会場レンタル	¥50,000
2) インタビューデータ文字起こし 謝礼	¥25,000
3) 通信費 参加家庭への連絡	¥11,559
4) 報告書作成	¥85,000

※ 領収書は各費目ごとにA4用紙に貼付し、通し番号を付けてください。